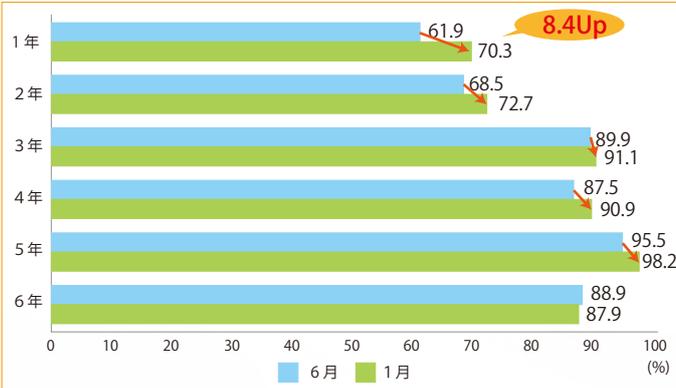


文部科学省「食育に関するアンケート」より

児童の変容【事前（6月）と事後（1月）のアンケート調査の比較】

好き嫌いをしないで食べている

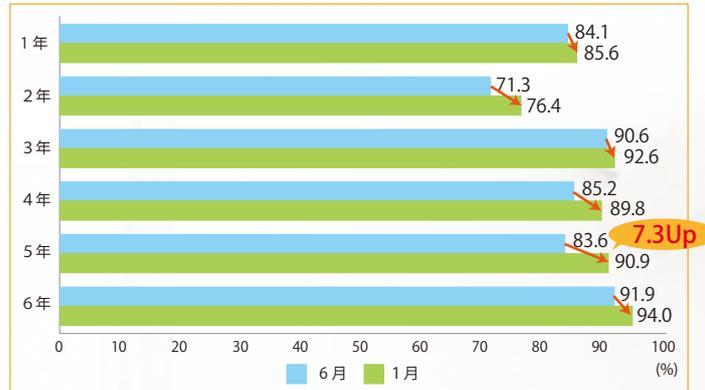
肯定的回答の割合（とてもあてはまる+まああてはまる）



ほとんどの学年において、肯定的回答の割合が増加した。

おはしを正しく使って食事をしている

肯定的回答の割合（とてもあてはまる+まああてはまる）



全ての学年において、肯定的回答の割合が増加した。

〈保護者アンケートより〉

Q1 子供の食に関する意識のうち何が高まったか

栄養バランスを考えた食事をとること	64.9%
食事マナーを身に付けること	50.4%
食事の際に衛生的な行動をとること	40.2%
朝食を食べること	32.9%
伝統的な食文化や行事食を学ぶこと	29.5%
家族などと一緒に食事を食べること	28.1%
ゆっくりよく噛んで食べること	17.9%

Q2 子供の食習慣のうち何が改善されたか

食事マナーが身に付いた	52.6%
栄養バランスを考えた食事をとる回数が増えた	45.8%
食事の際に衛生的な行動をとるようになった	36.2%
伝統的な食文化や行事食について理解した	21.8%
ゆっくりよく噛んで食べるようになった	15.0%
朝食を食べる回数が増えた	12.0%
家族と一緒に食事をする回数が増えた	12.0%

Q3 今年度の食育に関する取組に関する成果や課題、感想

【感想】子供の様子が変わった（子の食への意識が高まった）	54.1%
【意見】学校での継続的な取組や幅広い学年での取組が必要	12.0%
【感想】保護者にとっても勉強になった	10.5%
【意見】学校での食育の取組に対する具体的な意見	10.5%
【感想】家庭での食事が変化した（親も食への意識が高まった）	5.3%
【感想】親子でコミュニケーションをとるようになった・会話が増えた	5.3%
【意見】学校での取組について保護者への情報提供が必要	1.5%
【意見】保護者の意識を高める取組が必要（レシピ提供など）	0.8%

食育講演会参加者数(人)	141人	→	170人
好き嫌いをしないで食べている児童の割合(%)	81.2%	→	84.5%
おはしを正しく使って食事をしている児童の割合(%)	83.7%	→	88.1%
学校給食の残食率(%)	3.6%	→	3.0%

校内の全教職員がつながり、さらに、家庭や地域とつながることでより教育効果の高い取組を行うことができた。

【研究のテーマ】
家庭とともに取り組む食生活改善プロジェクト

- 1 学校内のつながりを重視した取組
- 2 家庭とのつながりを重視した取組
- 3 地域等とのつながりを重視した取組

食に関する指導の目標



本研究で目指すこと

食に関する意識の向上と食生活改善

児童や保護者の食に関する意識が向上し、日頃から気を付けようとする姿が見られた。

成果と課題

〈成果〉

「給食の時間においては、よく噛んで、好き嫌いをしないで食べるなど、健康に良い食べ方が身に付いてきた。」「家庭においては、料理やお皿洗いなどにも取り組む児童が増え、自分や家族の食生活を主体的によりよくしようとする態度が育ってきた。」といった児童の変容が見られた。

特に、この研究で成果が大きかった点は、「食育チャレンジシート」を通して双方向で取り組むことにより、保護者の食に対する意識の向上がみられたことである。家庭での食生活の改善が図られ、児童の変容につながった。

〈課題〉

学校の教育課程においてはこれからの社会の変化に対応できる子どもたちを育成するために、食育以外にも様々な教育を行っていかねばならないため、限られた時間の中で最大限の効果を得られるよう、給食の時間や教科等の学習、地域の取組などと関連を図りながら、計画的に食育を推進する必要があると考えている。

「つながる食育推進事業」のモデル校として研究をすることで、校内の教職員がつながること、学校と家庭がつながること、また、学校と地域がつながることの大切さを実感した。本研究で見られた成果が、一過性のものとならないよう、今後も家庭や地域等と連携した取組を継続していきたい。

成果

- ・給食の時間においては、よく噛んで、好き嫌いをしないで食べるなど、健康に良い食べ方が身に付いてきた。
- ・家庭においては、料理やお皿洗いなどにも取り組む児童が増え、自分や家族の食生活を主体的によりよくしようとする態度が育ってきた。
- ・日常の会話や食育チャレンジシートの記載などから、保護者の食に対する意識の高まりが見受けられた。

課題

- ・限られた時間の中で最大限の効果を得られるよう、給食の時間や教科等の学習、地域の取組などに関連を図りながら、計画的に食育を推進する必要がある。
- ・本研究で見られた成果が、一過性のものとならないよう、今後も家庭と連携した取組を継続していく必要がある。



**健全な食生活を実現するために
必要な資質や能力を育成を目指す。**

最後に

第2回第栃木県つながる食育推進協議会から

[委員からの意見等]

○食育チャレンジシートについて

- ・アンケート調査結果から、今泉小児童の食への意識は高いが、実践が伴わない現状があった。「食育チャレンジシート」は、意識を行動へとつなげるためのツールとして行った。
- ・保護者懇談会を利用して丁寧に説明した上で配布したり、夏休み中の個人懇談時に、担任から一人一人の食の課題や良い点を伝えたりすることで、保護者の理解や協力を得ることができた。
- ・保護者の意見は以下のとおり。
 - 「食育チャレンジシート」が一番のつながりとなった。
 - お弁当の日の後の「食育チャレンジシート」の◎は多くなった。
 - 食育は、内容が広いので、内容をしぼると◎がつけやすい。
 - 学年によっては、テーマを分けるとチェックしやすいのではないか。
 - 平日の方がチェックしやすい家庭もある。
- ・今泉小の保護者は、教育への意識が高い。1年で終わるのではなく、来年度も続けてほしい。

○県立宇都宮白楊高等学校との交流について

- ・県立宇都宮白楊高等学校との交流は、地の利を生かした素晴らしい取組である。また、高校生が自ら考えて実践できているところが素晴らしい。
- ・高校生にとってもよい機会となった。生徒が教師役として参加し、交流する年齢幅が広がった。高校3年生の生徒にとっても、とても印象に残った。食物の大切を理解し、大人になっても、子どもたちに食の大切さを伝えていきたいという声も聞かれた。

○家庭・地域との連携について

- ・地産地消の働きかけが、ありがたい。JAでは、様々な農業に親しむ取組を行っている。地域の食材で、食を通して、子供・成人・高齢者が体づくりをしてほしい。
- ・農業高校は、地域とのつながりがある。地域の小中学生との交流は、高校生にとって、自己有用感

の育成につながる。

- ・県学校給食会としても、地域とのつながりを進めている。県内外の多くのメーカーとのつながりがあるので、出前講座や料理教室などで協力できる。

○宇都宮市における今後の展開について

- ・食に関わらず、運動（体育）や肥満（保健）など、他の内容とのつながりが広がり、素晴らしい事業となった。今後、宇都宮市では、体力向上推進計画に安全を加え、この今泉小の取組を、市全体へ広げていきたい。
- ・本事業により、『つながる』ことの大切さを感じた。次年度以降、各学年の実態に合わせて市内全体で取り組めるようにしていきたい。
- ・市食育推進計画を展開しているが、本事業を契機に、主に成人に普及させたい。
- ・「ママパパ学級」「幼児検診（3歳）」において、親世代に意識をもたせたい。

○モデル校より

〈養護教諭〉

- ・校内の教職員の理解が得られ、やっと始まったという感じ。保護者指導の厳しさを感じていた。学級担任の理解が進み、肥満指導がスムーズに実施できた。

〈栄養教諭〉

- ・全職員で取り組むためには、校長のリーダーシップが欠かせない。管理職が後押ししてくれたおかげで、学校全体で取り組むことができた。
- ・「つながる食育通信」により、教職員の理解・協力を得ることができた。

〈学校長〉

- ・本事業を通して、校内の体制を見直すことができた。また、保護者や関係機関とのつながりができ、宇都宮白楊高校とのさらなるつながりができた。
- ・子供の成長のため、栄養・保健のため、できることとできないことを精査し、次年度以降も無理なく継続できるもので、しっかりと取り組んでいきたい。

委員長より総括

宇都宮大学地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科教授 大森 玲子

- ・小学校入学後、好き嫌いしないで食べる 1 年生が多くなる。学校では、食事や運動について意識的に指導しているため、成果も出ている。
- ・働き盛りの親世代への啓発が難しい。今泉小では、子供を通して、大人（親）への啓発につながったのではないかと。
- ・本モデル事業を、県内全域で進めるためには、学校・家庭・地域が一体となって取り組むことが重要。
- ・県教委、市町教委、栄養教諭、養護教諭、校長会等、関係機関が連携していくことが大切。

・以下、5 点にまとめる。

①これまでは先生方の温度差があったようだが、管理職のリーダーシップのもと教職員が一丸となって同じ方向性で進められたことは大きな成果。

②学校、家庭、地域、それぞれが責任をもって取り組むことが必要。食育は手段のひとつ。食育を通

して、どんな子供を育てるか、それぞれの役割を明確にすることが重要である。

③本事業の核となった「食育チャレンジシート」の成果を、県内へ広げてほしい。学校だけでなく、高齢・福祉、幼稚園等でも活用できるのではないかと。若い世代への食育のためにも、高校・大学でも発展させていきたい。

④食育だけではないが、教育は学校だけでは限界にきている。「チーム学校」に地域をどう巻き込んでいくのか、考えてほしい。

⑤「考えながら食事をする事ができた」という素晴らしい児童の発言があった。今回のような事業で体制を構築する中で、子供がどう変容したかを見取っていくことが大切である。また、マスコットキャラクターや標語など、子供の潜在能力の高さに驚かされた。



平成30年2月28日

つながる食育推進事業 報告書



発行者・栃木県教育委員会事務局健康福利課

〒321-8501 栃木県宇都宮市塙田 1-1-20

TEL 028 (623) 3419

FAX 028 (623) 3437



今泉小学校食育キャラクター
「たのしくたべまる」

